

安原 盛彦 著



読み終えた後、静かではあるが深い感動に浸ることができた。

源氏物語は古くから関心が持たれ、読み継がれてきた平安時代の文学である。この時代の貴族住宅（寝殿造りと呼ばれる）の本格的な研究は昭和に入ってから開始されるが、それらの目的は主として平面規模や住まい方を解明することにあつた。この点については『源氏物語』の住宅に対しても同じである。しかし本書の目的は全く異なり、この物語を空間的観点から読み解くことにある。

寝殿造り住宅の居住空間は主として寝殿とその両脇にある対（たい）によって成り立つが、これらには中心の母屋から外側に向かって庇（ひさし）、簀子（すのこ）が設けられ、同心円的な構成となっていた。著者は光と闇の観点からこの空間を解き明かそうとしている。母屋は通常、戸や襖（ふすま）などの建具や几帳（きちょう）・屏風（びょうぶ）などの装置によって光が遮られた闇の

評・飯淵 康一（宮城学院女子大特任教授）

空間となっており、簀子には光が満ちあふれている。光は、庭に面した簀子から母屋に向かって減衰しながら次第に進み到達するのである。

『源氏物語』は男性が、母屋に住む女性に対し外から近づこうとする物語であるから、男性は光と共に入ってくることになる。物語の主人公が「光源氏」と呼ばれるのは極めて示唆的であると著者は言うのだ。

しかし物語は闇夜のなかでも進行するので、貴族たちは視覚のみならず聴覚、嗅覚などの五感をも駆使することになる。著者はこれらについても寝殿造り空間との関係で具体的に明らかにしていく。

本書が優れているのは、平安時代に身を置くのみならず寝殿造り空間を、現代から分析するという突き放した態度で書かれているからではないか。貴族たちが気づかなかつた事が指摘されているかもしれないのだ。解説書に留まらない独自の日本文化論がここに展開されている。

日本建築空間についての優れた随筆である谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』を、本書の観点から読み直してみたい気持ちにさせてくれる一冊であった。（河北新報社・1365円）

やすはら・もりひこ 1945年 横浜市生まれ、建築家。秋田県立大学教授など歴任。専門は空間史ほか。